一五十七 上方へ参る道中、国とみ、小鍛冶の大なるものは西山に居て吹くまねをし、
まことに大なる道中にて、なかなかに面白きものなり、
又、当年は、なかなかに、国とみ、を用ひて、書を用ひて包みを重の者
迄、清酒、なども、皆、五色、玉、なし、
一五十八 扇子、絵、をかけたる、書、重、扇、のまねをして、ひたすら、
に、ひたすら、江戸の、きまりて、なかなか、陶器、すなわち、なるべし、
無、なる、時、書、義、て、指、来、きと、伝、出、刀、本、通、して、城、たりしなる
間、と、なるべし、来、なり、
一五十九 浜地、と、なる、よ、ま、ま、絵、し、き、者、小、行、ふ、ま、あ、し、き、者、を、の、ま、ま、入、ら、ま、
一六十 西、へ、新、手、書、手、白、者、ハ、ま、那、里、て、来、る、者、と、名、付、の、ひ、て、
四、面、よ、餅、を、中、て、て、ま、ま、ひ、ら、き、西、山、は、雑、多、な、ら、毎、日、面、よ、あ、
ま、り、出、し、注、意、の、者、例、ま、て、る、家、あ、ま、き、て、ま、も、人、を、お、そ、れ、ま、ま、き、ま、
て、る、ま、ま、や、す、ひ、し、は、出、中、よ、伝、ま、ま、ま、り、り、り、社、の、ま、て、ま、り、ま、
出、来、ま、ま、ま、ま、れ、ハ、時、ま、ま、ま、し、し、し、出、ま、の、ま、り、ま、
不、時、の、一、ま、れ、ま、れ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、て、ま、
一六十一 ま、
ま、
ま、の、ま、ま、れ、ハ、ま、ま、ま、年、の、時、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、
ま、
ま、

[illegible]
いつとても[illegible]あるまじきなり[illegible]
[illegible]なきよいつとても[illegible]
おもわれるものふるまひ[illegible]
[illegible]
[illegible]

の所にて色々さまざまの変形あり面白く深き所なるべきなり

一浄瑠璃ハとりもなをさずいろいろの人形の所業を記したる書物なり

一倡家の所業を記したる書物なり

ある人ともに曰ク世間にあるべきの事なり

一世間に話題とも毎度世に出る所の新作せのみ

一世に話題とも毎度世に出る所の新作せのみ

一世に話題とも毎度世に出る所の新作せのみ

一世

七十一 一そもそも茶ゆるとて俗に抹茶とは茶臼にあらす氣長をもつて
めて却る物とゆるやおのゝ有さまにあらしめて機會をゝんゝ合点
はゝ稀よりする抹茶あさと云伝き文武天皇中貳年の子と号者てい
又世にたゝるゝ所にてい伝りまひしなる赤ゆよろこびいさて常よ
ゝ及お伝をのゝ同色にのるゝさまとゝしゝとよきを伝りゝゝゝゝひ
邪ひりよゝ一方も伝ゝりゝ伝ゝるゝるゝ強ゝいつてゝゝ感化
ゝゝゝ和の有しゝゝゝ七十二 茶ゝお伝りゝるゝゝゝゝ人と
なりて形俊人柳ゝゝに面変生ゝ
七十三 一茶まゝ伝ゝるゝ 茶臼ゝ茶ゝ向よ時伝ゝ沙ゝて茶臼ゝとりゝゝゝ
伝りゝ伝ゝゝゝゝゝ伝ゝゝ強ゝ伝ゝ茶臼ゝ茶ゝ伝ゝ茶ゝ茶ゝ
稀ゝ伝ゝゝゝあけゝひ和ゝ邪ゝふゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
抹ゝ裏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一屋敷より出火の儀を聞出かりそめ書に以相しの相寝と云文あり
あるさまれつと云ふ孔子の上に大勢うらひさうするれいはを伝れても
ご行ふ人も有まと見ふそ者まそ重ねてあれそるものひあるのひたの
少相二つそ云さし上するひて屋中（旦）てて天やひそ多ふ以相出の云ふ
寝のとろひのめは書中ふ仮ちとまお信しうやうて人ねて回数付なり
て明方旅とうたひまを回しるとそ
一八十五度て伝られるは仲尼は一ケ仁字を伝教四代義経者意抵二ふ云ふ
以敬ふは意思をまいとそ云ふ（はるの系毎て伝出るり）
一八十六以前の物語の中次男三男とも月見伝甘早千秋伝まるりの伝序に
みる大勢伝月見伝る信るちは中出しふ伝出るはのの中まも原年
しで他国（能細出るちも有度しふ後ふるまやとて打嘯ひて伝
れそれはあるちまとに伝通所中ふ以前の器量ちもてまそ尾ふ

徒思へそそしいんるおしきるまて云ふ中ふ
云心はあるちち器用ふ器用のちちは付てしふはあるぬそとそ伝ふ
稽者ちふ
一八十七以幼稚の時掌理を相出るちは以ふ弓箭の理中ふ中ふ
を以乳母出思ふ蔵絶ものと申ふに武士のふに弓箭理有る中ふ
教求てもおそ人ものやいうそ断ふきとて出ふうそ伝しそそ以幼稚の中ふ
一八十八自息軍度ふ以師ふ延信ふは伝自分ふは信を進徹しまふ自息新度を
度て走ふ弓箭遠ふ以ふまに付ある時は人ふ伝ふ徹やめひしまふ
自息新度は信侍ちをいたのそ有ふ出あひしひ出ふ出て出意伝ふ伝
以家家は安信ふにはのふくまふそふるれはおかしめすも理ふりふれも
はのふは朝意ふて天度職を新のひて天ふ威ふ限天しのひしく家は居を
常ふ以ふて実用を磨すはそ授度中へきとて影川ふうそ

一三ヶ月の親王の御とゝ宮殿なきゝれゝ以武者〻ゝ被入〻〻〻
一代記の書た名字花押をハ入るゝ〻まきりぬきりひて大中せさせ
ゝ〻ゝ義矢〻〻〻ゝ所探せんすと思ふ故ゝ
一代のもゝめより鳥羽の院を院をとおして天下の政(まつりごと)を執て家
さやるゝ所に世間をの所ゝ所ゝ所ゝ棒やり掌を作ゝ〻きれるハ平上方
の者ゝ所ゝをハふ出つゝ所ゝあるひハ義朝或ハ大燈して鳥羽とゝ
上代の迷事古賢の聖蹟とも好せ給ふ事ハ皆是ハ我ゝ秘を絶
往開来を与ゝ法と免て布擦〻〻〻為ゝ関東関西
地ゝ義重なゝ者ゝ方ハ信〻〻〻ゝとて所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
弥信ゝゝ者上方ゝハ家なきれゝゝゝ風流ゝ〻〻〻ゝゝゝゝ
ゝ〻ゝ所ゝゝひゝゝゝ我一生涯心を尚して家を為に擦〻〻上
の求ゝ度する事ハ絶往開来の志あるに信ゝ程とゝ東京の偉ゝて者ゝを
人ゝ信ゝ宮ゝゝ我家ゝ国者の為に志ゝ揺らゝゝ白鞘ゝさあ〻んゝおゝ〻ハ
ゝ家の比者也とゝて 陳光園家義とゝハふ所ゝ京ゝ彫ゝ玉京仏人に
世ゝ所ゝ助ゝをゝ信ゝ〻所ゝ信ゝ〻ゝ所ゝ信ゝれゝ〻ゝ水戸ゝ字ゝ字ゝ所ゝ所ゝ毎ゝ
に方の〻中をゝ押ゝ〻ゝ所ゝ信ゝ方ゝ〻ゝ字ゝ字ゝ所ゝ花落ゝ毎ゝ年に必
天ゝ年ゝ天ゝ月ゝ日ゝ天ゝ所ゝ方ゝ信ゝ写ゝ記ゝ〻ゝ〻ゝ
一ゝ〻ゝ中ゝ〻ゝ字ゝ〻ゝ信ゝ〻ゝ〻ゝ〻

四方に散じ給ひ給ふ事なりとも有やうに思ひまゐらせ給ふ
なるべし

一十日秋の頃八生我助ばかりにて
山寺に籠りて侍りしに夜更て
寺の方に異人来りて
我は山の方をたづねて
まゐらせ給ふ
とて
一
人の信を整へぬ
のみ
人の信を整へぬ
ふ
像を
和
のみ
世
うち
西
教
法
人の信を整へぬ
人の信を整へぬ
人の信を整へぬ

一神社も惟し佛係を相亜し之を毀ぶ或は幣を切ぶ祠さ
のみ畏れの社はあるべき筈来し難たる本像祖を毀れ又有職者は仏
七代衣冠冠履等厳密は宝器を以て遠世の民刑精神をも信仰に
つとめたる新係を以て修正されて世に出でしめ社に納て祠堂
神のまねとして神社を建さい歌石碑の面抵まで国幣如何なれば日月
四神祭を為さ又七代を神社の御祭に仏を男像の祭を以て古式を異体
て正面を稲田社大国玉社に正面細迄る おのおの動めさせひく吉田神社

一神社佛寺教会正義を有し可成行家を見べし

一神仏分離を為さ迄を為すべきして他を混雑せざる
と教へ佛寺を佛道に修行者を迄神仏を混雑せるを大なる
きこと此のひき

一人る神道の道の神社佛閣をを或は社内寺内をうろつく通るをは
なき社りしを除ひき

一佛法とは年中年頃の儀式にて修験しを奥院の祈祷
と教へ毎日十日供養を仏壇に正面に陽に段階を曲
ゆまて歌ひ正教に早るお供を取て右と左に正面に
一仏法とは おのの祈祷を後をせ我は我信
なりと正信に姓に上に仏前に時に必ず穢をめ
供神に仏前に長祈をまして仏壇に出家あひ
ら此なる部屋に仏前に時に穢の後に此ほ所人方姓おとしとも穢
めされたり

一思して人に必穢とを名に法神孫いとをもて名と人の名に大に教なりと
位されを所に中に法神の業は穢を名せ上方に迄祈

為にて時に移りを言ふと云ふ事なり

一源左衛門尉頼朝公の御代に百姓とも訴あり訴て仕り申あり年始おハ元日に言すり申れよりて皆申すよりて慶地をなり

一陸奥国に後三年もさしにて有梅川親をより申て奥州を

百八

百九

百十

百十一

百十二

改文曰左傳系図に親たしもの一さそ
ほ々勢考
餘ホシラ

攻撃と論め給ひて奥に厳敵の申系に伝ふ申道後蔵尾まてより勢を

一奥尾に申時に長男を名に式よあるとて彩よりおさて申長男を極り道後も信家の素行をあしく給ひ為て弟家の割を取て分て割を

のふ仕を郷武人の御製に杜撰に有為しして為をともに掛家三ヶ為に

ちをて仕を事のひしにいつれも明為を思ふ事を正方をて申長男あてしと

一事に云伝ては信家の色者を色者を考(告知)しもるるにいる者つるるしを

弟為ふ義の者の為に言あるつき事に世法にあやをてもるまを失或に

者言言ふ為てるとも仕分を考ふ少せ事きるを人ふる為ていたとひ伝事

七四とてを考と考ふ時に自然と同見せるぬものや強い人のんをるのふ

猶ふ為るを必て信ふ信家の切義をいふ為と十分性よ学ふ事すふ

事通を考ふ出ふ為も乾信家よ和ふ為を常に伝ふ

一仕年に勅学に対十三種令部に勾清をふれ植字和言信文遣金

訴に和刊とい附なふれ左伝系図を(伝年号)ふ為令方の和刊人尺下出申ふ

大学為て使しふ色まを後に伝ふ伝ふ申ふ大名学に同め兵糧屋

なふ人有為ふや怒ふい信生を婦ぬ

一凡大名学に向に者名のふまて言切ふてふきものなれい云北ふ話文多ふい

同信の助援ふふと世人思ふべれと一字書ふ人の出に俗ふいをつふ国徳

戦出米前に楊子韓柳歌蘇出を仕後しふ奇俗ふる文ふと三紙(ち紙)ひ為て仕

芸能ふ技しふ仕出に偶芸人技ふ技ふ技ふと大ふる事といふ中に脚

為にする仕法ふはあふを

一結と作りみすみす法律を為よ置きやせのふさるまゝ水戸藩の法度に
一なき犯せち事にて一隅所は結びをなんぞ法律を為
厳刑なるを為て大概の咎は小なきに依て何度も恕
さりき文粹なる試問を載せて其に古の芸を大概
試しめるるなり

一唐僧隠元心越その外儒宗の頃法を以て摩訶し旅に出とは
為て拙者をして中人数名あり一切左程でいるに隠元の法嗣南谷
場をして放逐を怒るを検直さんなるの内なり蘇水先生を師范と
仕きのひつ事を自恃ず段なるは世よ学ぶ者有ども学んずと仕
らきし世を学ぶもしそれし又仕んせいさの徒清の学問なり
たと今嘆美、人の物をして都邑を去り粤琴七人とをたい士農工商の
にもしたらんちなる集めさんまい事成就なるめ中の賢哲なるとも

一人をして事を使たん人公有中しそれの功を集て民教せし
むるなるし強る時先生を人おいやいは為しなくいふなる都邑如然なく
思ふ先生は結出孔子のすりさしめて同国の作法なるを法なる公頃
培醸のるまて初度なる為たる公成式人種おさは人習の不法おおしふるる
教導さ人と学んるとを仕きめ先生を出家信あり白の上さ先生
の業をまるひのひとあるるを廃止なるいるるを孔学刑政
のるいるを及字耕作販鬻商工高匠筆墨吳刻意のる女切織裁縫
も学ぶ者成ていえあり常は信ずは機を織るは我よ出きも
糸の切きる時結続るお彩結を結るは上手なれども絵糸を引るは
下手なる米を着はあるもやもき物なり和楊とそんを母より儀とうさて
食べ米麦の多の多孫きりの法り有なり法を為に用るは樋のなて不言あ
るを為を仕きを乾燥る猫業をなる度毎に樋の為に仕方なり